
Infinity-Revenge

天龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinity - Revenge

【ZPDF】

Z8550C

【作者名】

天龍

【あらすじ】

組の代紋を掲げ安藤組の組長を勤める若き男安藤龍一は組の勢力を拡大、そして亡き父親が成し遂げられなかつた世界平和を築き上げようとする。しかしその道は空の如く遠い、いばらの道であつた。戦争、暴力、裏切りが多いヤクザの道で龍一は見事に世界平和を成し遂げられるのか? Infinity - Revenge 無限の復讐

序章1 安藤龍一（前書き）

本小説における人物、都市名、団体名は全て架空です。また、本小説は暴力的な文や、それを連想させるような表現が含まれています。

序章

西暦2000年4月21日
午前6時00分

日本

「ここは都心の真ん中に位置する首都

一人の男がある仕事を終えた時間である。

氣だるそうに煙草の煙を吐き、依頼者に連絡を取る。

「「苦労だったな。これでお前等に大っぴらに力を貸せる。喜べ。
頭の堅い親父もお前等を氣に入るだろ?」」 依頼者は笑いながら言
う。

「恐縮です。あなた様方杉山組のお力を借りれば私たちは鼻が高い
限りです。これからは手を取り合い協力し、全ての邪魔者どもを排
除していきましょう。」

依頼者は笑いが止まらない。

「そうかそうか。鼻が高いとは。それはよかつた。しかし面倒事を
しおつちゅう起こすのは「免だぞ。うちもそこまで暇じゃないんだ
からな。わかつてゐるな?」

「わかつてますよ。これでも一組の頭を張つてゐんですから。そこの
らのチンピラと一緒にしないでください。」

「うむ。そうだな。小さくとも立派な組だもんな。ハツハツハ。」

「からかわんでください。これでも命懸けてるんですから。」

「悪かった。とにかくこれからうちの事務所に来い。今から親父が
盆交わすだよ。喜べ。」

「わかりました。早急に向かいります。ではまた後で。」

電話を切る。

「ふうう。」煙草を捨て

「ダルいな。しかしこんなにも早く盆を交わすとは、あの組長も
意外と頭が柔らかいんだな。まあその方がいいんだけどな。後は
すぐキレる所を治せばいい組長なんだけどな。」

男は好意を持つと同時に愚痴までを言う。

弱冠16歳で組を張る男は一昔までは誰もが知ると言われた組であ
った頭の親の子供だ。先代の死後替わりを勤めたのだ。カリスマ性
を親から引き継ぎ、その実力を買われ2代目に襲名された。16とい
えば世間では高校に行き授業を受け、たわいのない会話をし1日
を過ごす。これが普通であり、またそれが一種の幸せな日常なのだ。
しかしそんな常識に囚われないのがこの男、安藤龍一である。

安藤組の頭である。

皆が高校に行くのに自分だけ行けない、だかその理由を問うことも
ない。むしろ特別な自分に喜ぶときもあるほどである。身体はでか
く、ガタイもいい。スポーツをやればスカウトが来る位の身体能力
を持つ。容姿も悪くはない。中学ではファンクラブが出来た位だ。
ただ相手にけして弱みを見せないために人とは付き合わず、仲間を
作らない。一匹狼的な所がたまにキズ。

そして龍一は静かに立ち上がり、車に乗って杉山組へと向かうの
であった。

その場所から杉山組の事務所までは遠くない。10分や20分で
着いてしまう位に近い。

しかし龍一はある民家の駐車場に車を止めた。ここにはいつもこの
時間には顔を出す。

ドアを叩く。すると中から見た感じ80歳位のお婆さんが出てきた。

「「めん。起こしちやつたかな？」龍一は申し訳なさそうに言うと

「こいんじやよ。わたしや早起きじやから、とづくのとづく起きとるよ。しかしこいつも来て貰つて悪いね。龍ちゃんも忙しいだろ？」

「こいんだよ。気にしなくてたって。婆ちゃんの為だもん。それより

身体大丈夫なの？」

心配そうに言つと

「なあに、そんなこと言つたってわたしやこんなにぴんぴんしどりよ。まだまだ若いんだから、これだけはわたしの取り柄だよ。」

お婆さんが元気に笑いながら言つ

「でも気を付けなよ。病は突然来るんだから、それよりいつもの持つて來たよ、これ。」龍一が封筒に入つた現金を渡す

「本当にいつも悪いね、龍ちゃんだつて辛いのにいつも貰つて。」

「いいんだよ。昔よく世話をなつたし、こんくらいどうつてことないんだから。それに俺ね、いつぱい稼いだんだ。だから今日はいつもより多くしといたよ。」

お婆さんが封筒の中身を覗く。

「ええ～！なんでこんなに…？」「こんなにもうつたらバチが当たつちゃうよ！」

「いいつて。本当に。感謝の気持ちだから取つといてよ。」

「だつてあんた、これは…」

「いいんだから。稼いだつて言つたる。これ受け取んなかつたら気持ちにならないだろ。」

龍一は強く押し出す。

「本当に…、本当にいいのかい？」

お婆さんが何度も顔を見ながら聞く。

龍一は

「うん」と頷く。

お婆さんは泣いてしまつた。余程嬉しかつたのであらう。

龍一は幼い頃、家庭の事情で命を狙われやすく、よくこのお婆さんに匿つてもらつたのだ。母親を幼い頃に亡くし、愛情が殆んどな

かつたため、お婆さんは実の我が子のよつこ龍一を世話をした。義理人情の堅いヤクザの家に生まれた龍一は、お婆さんを逆に世話するようになり、今に至るのだ。

だからどんなことが起きてても、一日一回の時間に必ず顔を出さねば。

「龍ちゃんは」んなにいっ子に育つてくれて。わたしや嬉しこよ。

「まあもしそうだとしたらそれは婆ちゃんのおかげかな。」

「本当にこい子……だよ……」

「婆ちゃん?…寝ちゃつたか。泣き疲れたのか。」

龍一はお婆さんを抱き抱え布団の上にゆづくつ置くと小さな声でおやすみと囁いた。

車に乗り、杉山組の事務所へと向かう龍一は考え事をしていた。これからの自分の組の事。そして自身の事。杉山組と盃を交わせば組織は大きくなる。組織が大きくなれば組員もそれだけの多い人数になる。統率力、財力。そしていつもよりもカリスマ性が要求される。良いとされた組織拡大も、不安と同じに多い。龍一はそのことで頭がいっぱいだった。

（こんな時親父はどうする？何を思う？不安はないのか？いやいや。親父には頼るな。いや頼れないんだ。この世にはもういない。なぜこんなにも重い。願った事なのに。）

…くそつ。こんな性格は嫌いだ。俺の駄目な所だ。治さねば。そうじゃなきゃ出来んのだ。頭なんて張れやしない。そうだ。自分で決める。頭なんだ。俺は。

夢を叶える。そう信じてここまできた。やるしかない。）

龍一は思い思いを考えた。事務所に向かっているのも忘れるぐらい。

気付けばもうそこは杉山組の事務所だ。

都心の中心部。それゆえにその広さを現し、威厳を保った扉。暗い朝方なのにまるで昼間のような明るさだ。他の店を寄せ付けぬ門番は、目をギラギラさせて見張りという仕事をこなしている。

組員にドアを開けられ、重い足を上げて外に立つ。いつにもない緊迫した空気が龍一の身体を取り巻く。

杉山組組員は龍一を見て、お疲れ様です、と一言いい、その重い扉を開ける。

中は不動産のような間取り。
しかしそれは表向きである。

不動産屋には門番なんて物騒な連中はいない。

開店前だけであらう。

自分の組員を車に待たせ、一人でいい、と一言いい、アタッシュケ
ースを持ち中に入る。

門番が道案内し、忍者扉のようなもので隠し部屋を匿うようにして
いる。もし警察に踏み込まれても大丈夫なようにしているのだろう。
扉に手を掛けて奥に乗り込む。そこには四人の組員が顔を出す。そ
の一人は先程の電話の相手。つまり依頼者だ。杉山組の若頭、竹田
新蔵である。彼は若い頃から杉山組長の知り合い。親密な関係だか
らこそ若頭という大役を任せている。

「遅かったな。またいつも仕送りか？お前も人がいいな。」

「自分にとつては親みたいなもんです。それより組長は？」

「今は席を外している。全く困った所だ。あの歳でまだ欲求がある
からな。本当に手に負えないくらいだ。」竹田は苦笑いで話す。

五代目斎藤組直系杉山組組長杉山道三は昔から女ぐせが悪いらしい。
そのことでよくトラブルを起こす。その度いつも処理をするのは竹
田だ。竹田はその事でよく頭を悩ます。

「酒に酔えばうちの組員にも手を出す始末だ。今日もそれなりに酔
つているはずだ。気を付けるよ。言葉一つで命に関わる事だ。だか
ら今からでもお前には釘を指しておぐ。肝に銘じておけ。」

「わかつています。だてに修羅場はぐぐつてませんよ。杉山組長も
そこまで手に負うような方ではないですから。」龍一が自慢気に言
うと竹田は笑う。

「まあお前の事だ。そんな心配は無いと思つたんだが。一応な。」

竹田とそのような雑談をしていると裏から人の怒鳴り声がする。
杉山道三だ。またいつも様に酒をかつくらつていたのである。組員は血だらけであつた。直ぐ様竹田が止めに入る。すると直ぐに怒鳴りが止む。やつぱりこの道30年のベテランだ。このような事

は既に手馴れている。

そして竹田に促されて龍一の所に寄つてくる。

「（イ）無沙汰しております。杉山組長。今日は誠に恐縮ですが盃の件を見事に用意していただいてありがとうございます。その心意気、痛み入ります。」

龍一は椅子から立ち深々とお辞儀をし、手元にあつたアタッシュケースを杉山組長に渡す。

「依頼物のブツでござります。どうぞ納めください。」

杉山は酒が抜けてないのか、いつになく不機嫌だ。

「ちつ。いぬをいガキだ。盃、盃いぬをいわーせつせとブツよーれんか！」

杉山は龍一から乱暴にアタッシュケースを奪い取る。緊迫した空気が流れるが龍一はたじろぐ事もなく

「そうですね。失礼しました。場もわきまえず自分だけが話しせ進めてしまつて。」

「当たり前じゃー全くこれだから最近のガキが組を張るところに調子こいてしまつんやー考え方ーボケエ！」杉山は当たり散らすよに暴言を吐く。

「誠に申し訳ありません。」

龍一は自身のプライドを捨て、その場に静かに土下座をする。組の為、夢の為に一番屈辱的なポーズをとる。

龍一にはそうするしかなかつた。組が全て、家族のようなもの。そう信じてここまできた。小さな組はこの盃を落としたら潰れてしまうのだ。そしたら殴打する？皆は親父や自分の為に組に入つて来た組員だ。その期待を踏みにじるようなことはしたくない。勢力を大きくし、今まで以上な組にする。そうすれば皆納得するはず。裏切りはしない。やつてはいけない。

そう考へてみると杉山組組員の一人、竹田が口を開く。

「親父。口を挟むようで誠に失礼なのですが、この若者を許してや

つてはいかかでしょうか？これだけ謝っているのに、これから手を取り合っていく仲間です。それを踏みにじるような事はしたくありません。どうか許してやってはくれませんか？私からもよろしくお願いします。」

竹田は龍一と同じ様にその場に膝まずき、土下座をする。

杉山は少し水を飲み、

「そうだな。少し度が過ぎた。今日の酒は少々悪い酒だ。こうなつてしまつたとは言い訳に近いがこちらも悪かった。勘弁してくれ。」

杉山は落ち着きを取り戻し、水を飲む。

「いえいえ。こちら側が全面的に失礼致したこと。責任はこっちにあるのです。それを許してくれるなんて願つてもない。誠に光榮です。」

龍一は直ぐ様謝罪をする。

竹田は顔を上げ、

「悪かったな。組長も謝つておられる。どうか許してくれ。」

「とんでもない。許すどころか怒つてもいませんよ。全てはこちらの責任なんですから。むしろこちらが謝るべきです。」

龍一と竹田のやりとりに杉山が口を挟む。

「もうよい。わしも自分を見失しなつてた。… そうだな。これからは手をくんぐ仲間になるんだからな。それくらいは水に流すようにないとな。」

杉山はタバコに火を付け、煙を吐く。

「恐縮です」と一言龍一はいい、椅子に戻る。

竹田は

「組長。直ぐにでも盃の準備を。」

と杉山に聞く。

すると杉山は、

「しかし安藤。お前のどこの組織は、どのくらいのものだ？」
と龍一に聞く。

「事務所は3店舗と組員が50人です。本部は…」

龍一が話すと杉山が口を挟む。

「そんなんでもうちと同等の盃か？」

と杉山が貶す。

「組長。今はそんなこと…」

「やつぱり、おかしくないか？うちの半分以下の組に…、そんなんじよぼくられた組どうちを同等にするのは…」

空気が変わる。

「しかし、私どもはその条件であなた方の依頼をこなしてきました。それを守つて戴かないとうちも田処が立ちません。その事を十分に話したではありませんか？」

龍一は杉山に問いただす。

「竹田。お前はどう思つ？」の盃、有効か無効か？」

杉山は竹田に話を振る。竹田は無言だ。

「しかし、それでは話しが違います。それでは…」

龍一は杉山をさらに問いただす。

その時竹田が口を開く。

「組長。安藤は盃をするためにこまでうちの仕事、依頼をこなしてきました。そこで今更この話は無かった、それではうちの面子にも影響を及ぼすでしょう。」

竹田が杉山に話を持ち掛ける。

しかし次の言葉はとても残酷なものだった。

「ですが、安藤組をこのままうちの傘下、いや。同等にするのも如何なものかと。」

竹田の口から思いも寄らぬ一言が発せられた。

「何故ですか！組長はいいとして、あんたは俺等の組織がどういうもんかわかつてたはずだ！なのに今更そんなこと言いやがって！話

がちがうじやねーか！ああ！」龍一は怒鳴り付ける。

周りは黙秘し続ける。

「そうだ。竹田…いや他の組員が拒否するならわしもその期待に答えなければな。 そりゃうるさいだろ？竹田？」

「おっしゃる通りです。組長。」

竹田が杉山に頷く。

「てめえらそれでもヤクザか！一回言つた事を変えんのか…」

龍一は立ち上がり反論を続ける。

「黙れ！ショボい組に力は貸せん！それだけだ！お前もそれを認めるくらい大人になりやがれ！」

「そんな一方的な要求呑めるわけねえだろ！ てめえらヤクザの風上にもおけねえカスどもだ！ショボいだのほざいてんじやねえよ！」

「このガキ！組長になんて口きいてんだ！ぶつ殺すぞ！」

辺りの組員はみんな龍一に向けて怒号を飛ばす。

「黙つてろ！約束の一つも守れねえくそ組織が！嘗めんじやねー！」

龍一は後ろの組員を蹴り飛ばす。組員はドアを破り、ロビーのような部屋にまで吹っ飛んだ。倒れたところでピクピクしている。

「おい！ てめえら！このガキ殺つちまえ！」杉山の一言で組員がドスを片手に、龍一めがけて向かって来る。

龍一は一人目の組員のドスを避けて、ボディに一発入れる。

組員は腹を押されて倒れた。龍一はドスを取り、向かって来た組員の腹を刺す。刺された組員は悲鳴を上げ、腹を押される。腹部からは夥しい血が出ていた。それに他の組員が怯え、たじろぐ。竹田が応援を呼び、裏から組員が次々に入つて来た。総勢10名は部屋に集まつた。龍一は直ぐに壁際に寄り間合いを取る。

緊迫感あふれる部屋で竹田が懐からトカレフを出し、龍一に向けて銃口を向ける。

「手間取らせやがつて、このクソガキ！死ねや！」

絶体絶命。しかし龍一は笑っていた。極めて冷静に、

「ふつ。 そんな玩具で勝つた気になつてんじやねーよ。俺だつたら

脅す前に迷わず撃つぜ。」

竹田がトカレフを撃つ。弾丸が龍一めがけて飛んでいくが僅かに反れた。

「あーあ。この距離で当たんないとは。センスがないんじゃねーの?しかもラストチャンスだつたのにな。」

龍一はそう言い放つと懐から何かを出そうとする。竹田が

「動くな!」と一言。だがそんな脅し、今更効くわけがない。

「早く撃たないとここにいる奴、みんな死ぬぜ?」

龍一は懐に入っていた手を静かに出した。それはパイナップル型の黒い物体。

手榴弾だ。そして龍一は迷わずピンを抜いた。

竹田は撃つのをやめ、杉山を裏口から外に出す。そして竹田が向いたその時、手榴弾が目の前の床に置いてあった。

「さよなら〜!」

龍一はそう言つて窓ガラスを破り、外に飛び出す。

「伏せろ!」竹田が怒鳴りを上げたとき、事務所はかつてない光に覆われ、それは轟音と共に消えていった。

龍一は爆風に吹き飛ばされたが、何とか受け身を取り上体を起こす。直ぐ様立ち上がり、仲間の所に逃げ出す。

しかし仲間は車の中で血を流し、すでに息絶えていた。

そして龍一は仲間に手を合わせ、追っ手から逃げていった。

畜生!畜生!

あのくそ野郎ども!

ふざけやがつて!

俺の全てを奪いやがつて!

ぶつ殺してやるー

俺も奪われたように、奴等の全てを奪つてやる。

復讐だ。

序章

終り

第1幕 真実

昨日の事務所爆破は、テレビ、新聞、週刊誌など様々なメディアに紹介された。5代目斎藤組直系杉山組組員は事務所にいた全員が死傷、杉山道三は無傷で済んでいた。竹田は致命的に片目と、全身火傷だけで済み、一命は取りとめたらしい。他の組員は死んだであろう。

龍一が目覚めたのは巨大なビジョンがある日本の首都、新宿である。既に時刻は夕方をまわっており、会社勤めのサラリーマンや〇〇、そして授業を終えた学生が行き交っていた。龍一はビジョンでニュースを見て、歩き始めた。

近くのコンビニに寄り、ちょっとした腹ごはんをしようとお茶とおにぎりを手に取りレジに向かつ。清算を済ませ、コンビニを出ようとすると男が二人揉めていた。一見して見ると、チンピラが一般人にいちやもんを付けているようだ。龍一はそれを気にせず、横を通り過ぎようとしたらチンピラが龍一の肩を掴んできた。

「おうこらーなに見とんじゃガキ！」とチンピラは龍一に因縁を振ってきた。龍一は肩から手を弾き、そのまま立ち去ろうとしたら今度は龍一の胸ぐらを掴んできた。

「こらあ！ なにしとんじゃ！ 死にたいんかああ！」

チンピラは凄みを効かせ、龍一を脅す。
しかし龍一には効く筈もない。

「全くいい加減なおっさんだな。そんなんじや女にやモテないぜ。センスのない絡みじや逆に引かれるよ？」

龍一はチンピラに向けてため息を漏らす。

「ああ！ 誰に口きいとんじやー！ ちょっとこちこちこいやー！」

「たち悪すぎ。それにおじさんこそ誰に言つてんの？ 痛い目見る前に消えて、そこら辺の一般人に吠えてれば？」

龍一の言葉にチンピラは遂にキレ、龍一に殴り掛かってくる。

龍一はやれやれ、と一言いい、チンピラの拳を避け、チンピラの顔に頭突きを喰らわす。チンピラの鼻からは血が出て、膝を着いた。

そして龍一は何の躊躇いもなく、そのままチンピラの顔を蹴り上げた。もうチンピラは歯向かう力もなく、そのまま倒れていった。

龍一はチンピラに近付き、髪の毛を掴んで顔を上げる。

「相手が悪かつたな、おじさん。」と龍一はチンピラに言った。

「はあ……はあ……お前、ただもんじゃねーな。」

「まあこれでも組張つてるからね。」

「……どこの組だ?」

「安藤組だ。」

龍一はチンピラに言い放つ。するとチンピラは鼻で笑いながらいつ言った。

「ああ、あの杉山組のケツ持ちか。俺はそんな情けねー組の頭にやられたのか。情けねー。本当情けねーな。」龍一は黙つてチンピラの顔を殴る。

チンピラは小声でさりに話を続ける。

「けつ。たかだか50人の組員もまとめられねえくせに、頭なんか張つて意氣がつてるから仲間に捨てられんだよ。」

「…何言つてんの?」

「知らねーのか、まあ無理もねえな。こんな組長だもんな。昨日の杉山組事務所爆破の後、安藤組の組員は全員杉山組に鞍替えしたんだよ。」

「なつ！なんだと！」「龍一は驚愕した。

（馬鹿な！そんなことはない！あの盆地は、俺は組員に逢つている！そんな時雨、片時もなかつたはずだ！況してや内通するにも奴等は接触していない！出来る筈がないんだ！どこで？いつ？俺の居ない時か？）

龍一は思いを巡らせ、自分自身に問いただす。

（どうか？竹田の野郎か！？竹田はうちの組員とは連絡を取り合つてゐる！仕事を依頼した時。その時しかないはず。あの野郎！全て

は俺を一人にしたのはそういう事か！畜なんてはなつから無かつたんだ！俺だけを出し置いてそんなことしやがったのか！畜生！…畜生っ！）

龍一は裏切られた。自分がしてはならない裏切りという卑劣な行為を相手にされた。

（うちの組員全員か！？全員グルだつたのか！あいつらには仁義が無いのか！？俺の、親父の組に対する忠誠は無かつたのか！？畜生！）

龍一は混乱した。まさか無いではあるう事が、現実に起きた。拳を強く握り、手からは血が出ていた。それくらい憎しみが出ていた。

「残念だつたな。氣の毒に。裏切られるとはな！ハツハツハ！…ざまーみる！アツハツハツハ！」

チンピラは高らかに笑い龍一を貶した。「うるせえ！…黙まれ！黙れえーーー！」

龍一は激怒し、チンピラの顔面を殴り付けた。今までに無い、それは残虐で、恐ろしく異常なまでに殴りまくった。

チンピラの顔は元の形がわからなくなるぐらい凸凹し、骨などが砕け、真っ赤に血に染まつた。

チンピラは既に息絶えていた。回りの人々が悲鳴を上げ、店の人は警察を呼んだ。

それでも尚、龍一の手は止まらない。その恐ろしさに誰も近付けず、誰もが早く警察が来るのを願っていた。

そんな中、その民衆を遮るように一人の男が龍一に近付く。

龍一は気付いていない。

そして龍一の腕を抑え、止めさせる。しかし龍一は、その男の手を払い、続けようとする。

だが次の瞬間、男は龍一の首に手刀を打つた。

龍一はその場に倒れ、うつ伏せになつた。

そして男は静かに龍一を担ぎはじめ、車を呼び、龍一を連れて何処かに消えていった。

僅か一分掛かるか掛からないかの、瞬間的な動作に誰もが目を向い、
その場に呆然と立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8550c/>

Infinity-Revenge

2010年10月15日20時55分発行